

硬式、軟式同時全国大会出場



松陵

能代高等学校同窓会
事務局
能代高校内
能代市字高橋2-1
TEL 0185-54-2230
題字は神馬会長

第74回 全国高校野球選手権大会 夏の甲子園

14年振り 甲子園出場

学校には試合終了後多くの市民や北海道にいるという同窓生から喜びの電話があった。まさに能代高校関係者の心を一つにした甲子園での勝利だった。

県内からは勿論東京や近畿から多くの同窓生が応援に駆け付けてくれた。

この試合は最後まで息をぬかせぬ戦いだった。1点を先行させていた9回、成田の2塁打や土崎の右前打で同点。さらに池端の二ゴロが併殺崩れになる間に、代走川原が生還して逆転。

29年ぶりの甲子園2勝目。メインボールに翻る校旗。抱き合って喜ぶ生徒・職員・同窓生。そして3千人の観客による校歌の大合唱。歌おうとしても涙が流れて声がでない。われわれ同窓生にとってはまさに感激の一瞬であった。

能代	10000001002
佐賀東	10000200000
	3 4

九回に逆転！
三千人による
校歌大合唱



八月十四日

甲子園三塁側
アルプスタ
ンドをうめる
能高応援団は

勝利の瞬間青春の血を爆発歓喜の渦につままれ私は前松陵会長の遺影に『勝った勝った相東さん校歌を聞いて下さい』と叫び続けました。

甲子園球場に流れる母校の校歌胸のふるえる思いでした。病床にあっても母校の遠征歌「潮騒さゆる北海の」と叫んでいた相東さん毎年甲子園出場を目指しながら期待に添えなかつた十三年長いトンネルから今こそ飛び出したのです。

今年春から甲子園出場の

甲子園出場にあたって!!

硬式野球部後援会

松陵会長 小林 治 (旧制9期)

本命は能高と目されブレッシュチャーもそれなりにありましたが全県大会は苦闘の試合を連覇して今甲子園球場での勝利、母校野球部の伝統の一ページを大きく飾ることが出来ました。

次の二回戦は皆よく頑張ったやっただけでも勝利には程遠いものでした。

此の敗戦の教訓を今後のチーム造りに生かして行くならば次の飛躍の踏み台を得た貴重な一戦だったと思います。

このたびの出場にあたりまして同窓生の皆様には物心両面において応援協力を頂きました事は我々松陵会としては心から厚くお礼申し上げます。

事務局より

●年会費二千元は、同封の払込通知票を用いて、払い込んで下さい。

●平成七年には、創立七十周年を迎えます。転居等で住所変更になった方をご存知の方は、振替用紙裏面記入欄にお書き下さい。

軟式野球部も 全国大会出場

軟式野球部後援会

高橋会長 芳屋 弘



(新制10期)
立冬の候、
皆様にはご
健勝のこと
お喜び申し上
げます。さて、

先般第三十七回全国高等学校軟式野球大会、六年ぶり十回目の出場に際しましては、同窓会々員のみならず広く地域、市民皆々様から心温まる御声援、多額の御寄付等物心両面にわたり、多大の御援助を賜り心より厚く御礼申し上げます。

名門復活を期し試合に挑みましたが、初戦において本大会で優勝を遂げた四日市高(北部九州、大分)に二―四で惜敗いたしました。しかし、内容的には安打数、奪三振数とも相手校を上回り、終盤まではリードを保つなど終始押しぎみの試合を展開、また高校生らしい好感のもてる態度は「東北の雄、能代高校」の名声を再び強く印象に残したものと確信しております。現在は新チームを結成し新た

な目標に向かって練習に励んでおります。今後とも能代高校軟式野球部に皆様の一層の、ご声援、御指導を賜りますようお願い申し上げます。



6年振り明石大会出場

コーチ 長谷川 拓也

(新制36期)



私は、昭和五十九年、能代高校を卒業し、同六十二年より臨床検査技師として神馬同窓会長の元、能代山本医師会病院に勤務しております。今年のバルセロナオリンピックでは、同校出身の鈴木選手が自転車競技で活躍されたことは、皆様重々御承知の通りだと思います。そして今でも私達に感動を与え、夢にまで見た軟式・硬式両野球部の全国大会

出場、心よりおめでとうございます。それは、能代高校創立以来、初の快挙だそうです。私もその軟式野球部の一〇Bでありますから、胸中に期したものは、人一倍でございます。

そして、コーチとして全国大会に同行させて頂いた訳ですが、残念ながら、勝利の女神は、こちらへは振り向いてくれませんでした。

しかし、負けの知らなかった選手達には、勝って得る喜びより、その一球の大切さや、勝つ為の難しさなど、本当にいい勉強だったのではないだろうか、そして、その悔しさをバネに、これからの人生に翔ばたい欲しいものです。

私が、高校在学中「人生哲学」として一つの言葉を頂きました。「野球は人生の縮図である」

それは、ピンチとなった時は、じっと耐え忍び、チャンスとなれば一気果敢に攻めたてる、私は、その言葉を胸に、今も自分にいいきかせ、自分を見つめ、前向きに生きて行く事を学んだ軟式野球部に心から感謝し、これからも伝統を重んじ、益々能代高校が発展、勇往邁進していくことを心からお祈りします。

同窓会だより

「定時制同窓の集い」

初めての交流

住吉 新作

(定時制2期)



本校に「定時制課程」が設置されたのは、昭和二十三年四月と記憶いたします。「光陰矢の如し」すでに四十五年も過ぎました。

本校同窓会名簿によると、卒業生は中心校・二ツ井・藤里・富根・八森・峰浜各分校で四百四十余名、職員八十余名となっております。しかし時代の変遷により、惜しくも昭和三十九年三月の卒業生を最後に、北校と併合し廃校となりました。

思えば戦後の混乱期であり、日本の将来も不透明な時代でしたが、私たちは職場と両立させながら、およそ四年間、学業を求め、諸先生を信頼し、夜の教室へ通いつづけました。

私の場合は中心校であり、樽子山の「学び舎」へ、急いで足を運んだ思い出は、決して忘れられません。私たちはこのよう

にして、伝統ある本校を卒業できたのです。

卒業後、分校だけの催しはありましたが、定時制全体としての交流はありませんでした。ところが昨年秋ごろ、こうした要望が高まり、去る一月十七日能代市「金勇」で「同窓の集い」を初めて開きました。

当日は遠い各地から、恩師を含め六十余名が集まりました。白髪が多くなった方、見事に禿げた方、上品な奥様風…。そして先輩と後輩、現役と退役、その差なく、旧交を暖め、大へん楽しい有意義な一日となりました。

加えて昨年夏、後輩たちが甲子園大会で活躍し、「校歌」を全国に紹介してくれましたが、あの感激は忘れません。

この日も私たちは会場で、みんなで声高らかに「校歌」を斉唱し、このあとの再会を約束し合ったのです。



▶初めての定時制同窓会

随想 同期会への旅

土井 啓 有

(新制4期 浦和市住)



平成四年九月十一日晴、私は入手するのが至難の業といわれてい

る寝台特急北斗星五号の個室切符を手に大宮駅から乗車した。翌十二日、国民年金保養センターのしろで開かれる新制四期生の同期会に出席するための旅の出発である。

旅の次いでに昭和六十三年に開通した青函トンネルと山形新幹線を初体験したかった。函館から折り返し、海底下百四十五メートルの海底駅を見学して予定どおり会場に到着した。十二日は快晴であった。

卒業四十周年の同期会は出席者五十六名で既に盛り上がりがあった。特に今年は母校の甲子園大会出場などの話題もあり、大盛況のうちに楽しい一夜を過ごすことが出来た。何よりも嬉しかったのは温泉で宿泊出来る会場を幹事諸兄が用意してくれたことである。

日曜日の十三日、晴、あまり見る機会の少ない、市内見学が催された。火力発電所をはじめはまなす画廊をそぞろ歩き、私たちには新学舎である高橋の現校舎、そしてなつかしい樽子山の旧学舎跡などをめぐり、昔話に花が咲き、四十年ぶりの旧交を暖めあった。

記念品に甲子園大会出場記念ペナントを頂戴した。今では我が書齋に登山記念のペナントと一緒に飾ってある。

同期生の大多数の諸兄は来年、還暦を迎える。私はひと足早く十二月に還暦となる。私にとって今回の同期会は素晴らしい還暦祝いの会でもあったと思っている。幹事役の諸兄ありがとうございます。帰路、秋田で秋田放送OB会の打ち合わせをすませ、こまき十二号から七月開業したばかりの山形新幹線のつばさ三十六号に乗車、車窓の秋を眺めながら思ったことは、故郷はいつ来ても暖かく迎えてくれる、決して遠くにありて思うものではないということだった。

十四日、晴、再び大宮駅に戻って、この旅を終えるにあたり、十年後の五十周年の同期会に、

もし、出席出来るとすれば、その時は空路、能代入りをしたいと思った。その頃には大館能代空港は完成していることだろう。

能代土曜会について

鶴 木 博 徳

(新制17期)



(四十卒)の仲間数人が大学を卒業して、能代に戻って来た昭和四十五年頃、夜の柳町を飲み歩いた縁がきっかけで出来た会です。その頃は毎週土曜日に集まっては酒のうまい梁山泊で、放歌高吟し、口角に泡をして人生を語ったものでした。

毎週土曜日に集うから土曜会なのですが、世に土曜会なるもの多数存在しているので、能代高校の能代をとって正調「能代土曜会」としたのです。能代土曜会がその名を同窓会の皆さんに知らしめたのは、昭和五十二年の高校野球青森大会の決勝戦でした。私どもが高校二年(昭和三十八年)の時、甲子園初出場して以来十四年ぶりの甲子園出場をかけた試合で、相手は同じ

秋田県勢の秋商でした。高松投手がホームランを打った時、能代土曜会の応援団は手製の幟を振りかざし、外野席を走り廻ったのです。以来高校野球秋田県大会で能代高校が出場する時には、常に能代土曜会の応援があり、特に決勝戦には全員参加が原則で外野席に幟を立てて応援しています。

会の活動としては、野球応援の他に会の十周年を記念して文集を昭和五十六年に発行しています。能代高校応援歌の一節から会誌の名前を「碧欄」とし、会員相互のジャンルにとらわれ



意気盛んなオールドボーイ達

ない関連な思いを綴ったものです。当初は季刊誌として毎年発行する予定でしたが、子育てら仕事の多忙に追われて現在は休刊していますが、近いうちに必ず再発行する予定です。

現在会員数は十名で、職業は、それぞれ違った仲間同志です。四十代も後半になり、子息のうち三名が母校に通学しており、PTAとして学校におじゃましていると思いますが、やはり私どもにはあの樽子山の木造の校舎が懐かしく、パンカラだった頃の思い出を子供達に語っている今日この頃です。そしてまた、

能代土曜会恒例の忘年会が間もなくやって来ます。期日は十二月三十日とここ数十年決っていて、会則にしたがって次年度の会長選を敢闘?に行った後に、「会歌」の人生劇場の高吟となり、やがて終宴近くになると能代高校応援歌のオンパレードが続きます。近年は白髪が増え、あるいは禿頭になって老いが近づいたのも忘れて、それぞれが悦に入っているのを見ると、おかしくもあるが当人は正にあの樽子山時代の青春に帰っているのです。最後はやはり「そのかみはるかー」校歌で締めくくります。

以上、能代土曜会のあらましを紹介しましたが、これからもこよなく母校を愛し、会としての活躍も大いにしていきたいと思っております。

野球記念碑を建立

甲子園大会・明石大会同時出場をたたえて

この夏、硬式野球部は14年振りに甲子園出場を果たし、軟式野球部も6年振りに明石大会出場を果たした。両野球部の栄光を讃えて前庭に「野球記念碑」が建立され、12月5日午後3時よ



記念碑除幕式風景、神馬会長挨拶

りその除幕式が行われた。

甲子園出場派遣委員長の神馬恒成同窓会長をはじめ、PTA、体育後援会、松陵会、高橋会、選手父兄、両部員、職員等らが参列し、神馬委員長、同窓会役員、大高体育後援会長、松陵会長、高橋会長、椎名校長、両野球部主将の手で除幕された。記念碑は高さ二、二メートル

ル、幅と奥行きが六十六センチの御影石の台座の上にボールとバットを型どったステンレス製の造形が載せられている。

台座正面には校是の「文武両道」と両野球部の「全国大会出場



思い出話に花が咲く懇親会

記念」の文字が彫られている。

また側面にはこれまでの両部の全国大会出場歩みが記された。懇親会の席では加賀正隆前校長、牛丸同窓会副会長、太田久元硬式野球部監督、小玉徳征前軟式野球部監督等の思い出話に花が咲き、これからの両部のますますの健闘を祈念して散会した。

「前庭生まれ変わる！」

至誠力行の校訓碑



去年大晦日のNHK紅白歌合戦を見ていると、「家族」とか「故郷」のことを思い起こす歌が多かったように思います。あの番組を見ながら、遠く故郷を

離れている人も、いない人も、ふと自分の故郷秋田を、あるいは母校能代高校を思い出した人も少なくなかったのではないでしようか。

しかし今、日本各地がそうであるように、故郷はいままでも一定不変のものではありません。少しずつ、いやある時は急激に変わってしまうことさえありま

す。母校能代高校も例外ではありません。樽子山より高橋に校舎が移ってからもう二十年近くになりました。そして今また、前庭が大きく生まれ変わりました。写真では一部しか紹介できませんが、掲載する通りです。

校舎は、何十年もすれば、老朽化し、いずれまた建て変えとなり、新しいものへと変わっていくでしょう。しかし、それに比べ校庭や庭の木々、記念碑などは、ずっと変わらずに残っているのです。同窓生が、何年、何十年後に母校を訪れた時も、



図書館より見た前庭全景、左側は自転車置場



オリンピック出場を讃える記念碑

相変わらず自分の思い出の中と同じく存在するものです。将来、このことのすばらしさ、安心感、同窓生にとって計り知れないことだろうと思います。

今の時点では、前庭ができたことは、大きな変化ですが、これからの同窓生の想いの中に確かな記念となっていくことでしょう。これからも、ぜひ機会があったら、同窓生が母校能代高校を訪ねたいと思うきっかけの一つになって欲しいものです。